

利根川水系利根川・江戸川河川整備計画(原案)の概要に関する意見

73歳

利根川水系利根川・江戸川河川整備計画(原案)概要を読んで、私は前々から何度も見てきた高崎から川原湯温泉までの河川沿いの様子を時間の許す限り歩いたり、自転車や電車を利用して見てみました。概要にまとめられていることと実際の様子とを比較確認してみたいということと、個人的に河川整備に期待していたことがあったからです。たとえば、河川はエネルギー源としても見直してゆく視点などがあってもよいのではないかとか、水利権の見直しが必要ではないかとか・・・「河川整備を総合的」に検証するのであれば、各テーマとテーマをつなぐ課題を示してほしい、そして 管轄機関の連携の手段を示してほしい・・・と。

なぜなら、中心市街地は空洞化しているのに、嘗ては 河川沿いは 遊水の地として家など建てられなかった所に家が建ち、住宅地、農業地、緑地、工業地、商業地がバラバラに混在し、その中を広い道路が縦横に走り、人々の繋がりを絶ちきるような町並みとなり、人々の生きるエネルギーがつかれないようなまちになっているのです。こうした変化は河川整備の施策だけで起きているものではないと思いますが、まったく無関係ではないと思います。この概要でも、総合的なテーマが示されています。しかし、そのテーマがダム造りをすすめるように偏っていたり、・・・目に見えずらい水利権の問題等に関するような課題についてはあつかわれていなかったりすることで、人間の命を守る事業として 血の通った内容になっていないように思われました。以下に具体的な事例の一部を示します。

イ 6. 1で、森林・水源林の機能の保全・・・とありますが、水道事業の利水事業で安定水利権の中にそれらの存在は一切切り捨てられています。火山灰によるレキ層が扇状に広がる大地上の町は地下水が豊富にあるにもかかわらず、一部地域の地盤沈下を理由に多くの地域で切り捨てられつつあります。田の保水力を維持する農業政策も貧弱になるにまかせているのを見るに忍びません。森林・水源林の機能の保全が私達の生活とどのように繋がるのかという視点が見えてこないのです。

ロ 6. 1で、流出土砂量の変化に対し・・・流域全体及び海域を視野に入れた総合的な河川管理が必要・・・とまとめています。たしかに 日本周辺の多くの海岸線が後退している事が大きな問題となっていますが、これも流出土石流の変化の問題の一つです。しかし、これは、ダム建設の推進が大きな要因の一つといわれています。河川管理だけで対応出来ないのではないのでしょうか。

ハ 烏川の君が代橋基準地点の基本高水量が県は2,600t/s 国は2,000t/sとしています。同じ地点で異なるのはなぜか、いずれに問い合わせても明確な答えは得られていません。倉渕ダム建設計画で、無駄な税金を使う必要はなかったのではないか、責任の所在もわからない事業がすすめられる危険を感じます。

ニ 6. 4に 利根川・江戸川では・・・先人の知恵に学ぶことが肝要です。・・・施設の保全、伝承に取り組みます。と提起されていますが、高崎市の烏川沿いを見る限り、その先人の知恵でつくられ、ついこの間まで守られてきた二線堤や霞堤が跡形なく壊されつつあります。今回の概要の5. 河川の整備の実施に関する事項の図面で示された烏川右岸の築堤計画のヶ所は、堤防はつくってはいけない場所ではなかったのでしょうか。しかし、今 河川間近に築堤が進んでいます。この地は烏川右岸側に連なる観音山丘陵の一部根小屋地区の「根小屋七沢暴れ沢」の沢水を烏川に落とすために川に直角に交わる深い堀が沢山つくられてきたのです。連続した川に平行の堤防など造れない地形だったのです。遊水の地として良質の米作地、畑作地として栄え

てきたのです。川の間近に まだ完成もしていないつくられ始めた築堤の間際に家が建ち始めているのを見て 河川計画とは何なのか、都市計画とは何なのか、河川計画と都市計画はどのように関わっているのか・・・総合的にの意味に疑問が広がるばかりです。

ホ 5. 1. 3の水質改善として、4つのテーマが掲げられていますが、私はその中の「吾妻川・・・新たな中和対策について、事業化に向けた調査及び検討を進めています。」については納得できないのです。なぜなら、「吾妻川上流における流入支流は、依然として酸性の強い状態である」と断じていますが、実際はいくつもある支流全部が強い酸性ではないのです。そうでなければ流域にたくさん発見された古代遺跡は存在しない筈です。吾妻川は酸性になっているとしても、全部の支流が酸性であるという捉え方は正確ではなく、対策の立て方にも問題が生じるのではないのでしょうか。次ぎに問題は、その水質改善策として、中和事業しか提案していませんが、温泉水は、酸性の成分の中に、いろいろの成分が含まれているのです。その成分の中にヒ素が多量に含まれており、中和することによって中和生成物が溜まり続け、その中和生成物の中で、より危険なヒ素化合物となることが無視されていることです。どういうことかということ、品木ダムから浚渫したものを排水処理して、土捨て場に積み上げるためにセメント固化するのですが、このセメントとヒ素が反応して一部が水溶性ヒ素酸塩となって溶出してくるのです。その堆積した山が崩れないという保証はないのですから、このヒ素を少しでも安全に処分する施策が求められているのが吾妻川の水質問題に加えられていないのです。しかし マスコミ報道でもこのことはとり上げられていません。少し取り上げている記事を見ても、ヒ素の危険性を正確に把握した内容にはなっていません。身の細る思いで、このことが取り上げられるようになることを期待しています。現場を見ての感想をさらに付け加えるならば、この処分場が、ただ穴を掘っただけのもので、ヒ素を含んだ中和生成物が微生物の影響を受けやすい処分場であることがわかります。ですからそこに廃棄することは、そのヒ素化合物が更に危険な有機ヒ素化合物に変化してしまう恐れもあるということです。

流れ続ける酸性水を中和し続ける品木ダムは、トイレのないマンションといわれる原子力発電になりつつあると思われてなりません。ヒ素被害が発生しない前に対策を立てることをこの計画の中に加えて欲しいものです。ある人はこの施設は草津温泉の風評被害を防ぐために必要であるといっておりました。さらにこのダムのお陰でヒ素中毒の危険性も防げるのだと・・・調査されていなかっただけで周辺の人々のヒ素被害はあつたはず。などといわれました。しかし何十年と川で釣りをしてきたという太公望の方や周辺の住民の方に、そんな話を聞いたことがあるか聞いても「そんなことはない」「昔の人がそんなところに住むわけがない」と自信を持って答えてくれます。ただ 巨大建造物を建てようとしたり、地質に合わない作物をつくろうとする人には酸性の川は不都合のようです。地質や水質は表面的には変えることができても、もともと人間がつくりだしたものではないのです。科学技術が発達し、何でも人間の都合の良いように関わろうとする思い上がりを感じる この様な事業について 政官財界はもとより、社会全体で考え直すことはできないのでしょうか。

利根川は、日本の中心に位置し、しかも首都圏の人々の命を支えていることは申し上げるまでもないことですが、この計画にその地域に暮らす人々の声が聞こえてきません。大地の声が聞こえてきません。大切な事業を それぞれの地域の状況見聞、人々の声・・・等々の集約しないで作成しているように思える原案に血が通うような工夫をとり入れることを心から願っています。

一枚に2枚あるため、切り張りました。

六

朝日 2009.11.13.

下ヒ系
の形
か
示
す
な
い